



INGING MOTORSPORT



INGING MOTORSPORT OFFICIAL WEBSITE OF PAPER [http://www.inging.co.jp]

INGING NEWS PAPER 2016 VOL.02

Race Report

Round.1 SUZUKA CIRCUIT 4/24 Final

決勝 2016年4月24日 鈴鹿サーキット

TAKEFREE



復活の国本 2位表彰台獲得!!

Round.2 OKAYAMA INTERNATIONAL CIRCUIT 5/28-5/29

Support by cyber net

国本、復活の走りで開幕戦8pt.獲得!!

Race Report 決勝 2016年4月24日 鈴鹿サーキット
Round.1 SUZUKA CIRCUIT 4/24 Final

天候:曇り | コース状況:ドライ | Time [1'14''11.125] / Best [1'41''.969]



決勝日の朝に駆けられているフリー走行は、前日の夜半に降った雨がコース上にとどろき残った状態でスタートした。気温は19℃、路面温度は21℃。まさに雨上がりの朝といった、どんよりとした空気の中、決勝に向けたチームのワークのためにスーパーフォーミュラのマシンがコースへ入っていく。予選後にチームが予想していた通り、このフリー走行ではロングランのワークがチームが主眼であった。P.111 / CERUMO / INGINGの2台をセクション最上位にタイムイン。前回は重ねている、ベストタイムは石浦が13番手タイム、国本も16番手タイムだったが、それぞれ10周以上のロングランでマシンとタイヤの状態を確認し、決勝へと臨んだ。

鈴鹿284レースというタイトル通り、4輪と2輪のビッグレースが併催で開催するイベントとあって、決勝日には約32,000人の観客がサーキットに詰めかけた。ピットワークの開始は目撃し難いほど早い。2輪の決勝レースを先走りでスーパーフォーミュラの決勝レースが始まるころには観客が広がり、いくらも温度も下がってきた。3分間のウォームアップ走行。そしてスタート走行を経て、いよいよ決勝レースがスタートした。

フロントスタートの国本は好スタートを決めてポジションキープ、15番手スタートの石浦も一つポジションを上げてオープンングラップを終えた。タイヤの変化が未知数のレースで、序盤は各車が様子をつかっているのかあまり劇的な追い込みは見られなかった。国本はトップの山本峻貴に少しづつ差を広げられるもの。突如としたペースでレースを進めていった。石浦は10周目にセクションを引っ付けていくが、これは他車がピットインした隙に自動的に入った状態。車体では上とそれなりのペースを出せるもの。前方のマシンにぶつかれば苦しい展開が待っていた。

前日数が半分過ぎたあたりからピット作業に入るマシンが現れ、レースにも動きが出始める。前のマシンにぶつかればペースを上げられなかった石浦も、23周目に車が関係なくペースアップ。21周目にピットインすると、給油のみの作業でコースに復帰した。石浦は走り前にピットに入ったままだった。2016年SUZUKA SUPER FORMULA Round 1 決勝のスタートラインに立ち、スタートの準備ができた。石浦はスタートラインに立ち、スタートの準備ができた。石浦はスタートラインに立ち、スタートの準備ができた。

2016年SUZUKA SUPER FORMULA Round 1 決勝のスタートラインに立ち、スタートの準備ができた。石浦はスタートラインに立ち、スタートの準備ができた。石浦はスタートラインに立ち、スタートの準備ができた。石浦はスタートラインに立ち、スタートの準備ができた。

2台の順位が分かれることになったが、それぞれのパフォーマンスの高さは十分に優勝争いに加わることも証明できた。決勝、石浦が初優勝を挙げた岡山で、2台揃っての上位フィニッシュを目指す。

石浦 宏明 / H.Ishihara

「開幕や、スタート、レース中もいろいろとトライして来ました。やはりあの位置からスタートでは大きなセクションアップは難しかったです。一番ではありましたが、前にクルマがなくなった方がいいタイムを出せることができました。だから、それだけのパフォーマンスを出せることができて良かったです。だから、それだけにもなりました。何事もなければ結構です。あのレースは、自分も、それだけのポジションにいたい。自分も、それだけのポジションにいたい。自分も、それだけのポジションにいたい。」

Driver

国本 雄資 / Y.Kunimoto

「なんと2分位の差まで表彰台に上がったことがすごく嬉しいですね。山本選手にペースを奪われてしまったので、後ろからハイトーン選手が追ってくるのも感じながら、ミスなくペースをコントロールするのは大変でした。ハイトーン選手と同じくらいタイムを走っていたので大きなミスがなければ自分にはないと思います。お互い競争の中で走っていたので、本当に半信半疑の戦いです。チームも2位に入れるクルマを用意してくれて、すごく感謝しています。ヨコハマタイヤも未知数でしたが、タイヤのグリップ、パフォーマンス、レース距離を走って初めてどうかな、などいろいろ分かりました。今後とも問題なく走行できるように、次の岡山も同じように戦ってみたいと思います。」

Driver

立川 祐路 / Y.Tachikawa

「国本は、予選だけでなく決勝でもペースは悪くなかったです。今年はこのままいいリズムに乗ってほしいと思います。石浦も、前のマシンがなくなったときにはトップよりいいタイムで走っていたので、予選前から決勝までペースは悪くありませんでした。2人とも上位で戦える状態だったので、次は2人そろって上位に行きたいですね。僕自身の理想は、2台で優勝争いをする。国本はこの勢いを維持して、石浦は仕切りなおして岡山に向かいたいと思います。」

Team Manager

浜島 裕英 / H.Hamashima

「朝のフリー走行で分かったことは、今回はいくらもセクションアップが可能なタイヤがないということでした。これはまったくのチームも分かったことだと思っています。実際のレースでも、全体的になかなかタイムが落ちてこなかった。できるだけピットインを遅らせてセクションをキープした方が有利だろうと判断しました。もちろん石浦選手も、エアーコントロールは入れてあげたい。僕も考えていました。なかのあの前のマシンを取ったのが誤算でした。ただ、クルマの反応は確認できました。僕も選手もハイトーン選手を倒して、次に表彰台に上がったことは自分にとって大きな喜びです。3台は2人そろっていいですね。」

General Manager